「不死細胞ヒーラ」

レベッカ・スクルート著　中里京子訳

B5版，464ページ，￥2800（税別）
（講談社，2011年6月第1刷発行，同年11月第3刷発行）

万能細胞であるiPS細胞や胚性幹細胞（ES細胞）を活用した先端医療の技術進歩は目覚しいものがあり，再生医療など今後の医学技術の発展が期待されている。しかし，史上はじめてヒトから分離・培養された細胞株，「ヒーラ（Hela）細胞」の起源について知っているものは少ない。ヒーラ細胞は，1951年にヘンリエッタ・ラックスという貧しい黒人のタバコ農婦だった身体から，本人の同意なく採取された子宮頚部の癌細胞である。その異常なまでの増殖能力を持つ不死化した癌細胞は，ポリオワクチンの開発，化学療法，クローニング，遺伝子マップの作製，体外受精，そして癌研究と，あらゆる研究に幅広く活用され，医学界に革命を起こしてきた。20世紀後半の急激な医学進歩は，この細胞なしではありえないといえる。

本書は，一人の黒人女性とその家族が辿った数奇な運命，そしてヒーラ細胞をめぐる，科学や倫理学，人種や階級に関する社会問題に迫るノンフィクションの衝撃と感動の一冊である。2010年米国Amazonが選ぶ「ベスト本」シリーズ第1位のほか，ニューヨークタイムズをはじめとする60以上のメディアから2010年のベスト作品に選ばれている。原著名は「The Immortal Life of Henrietta Lacks」である。

本書のプロローグに，「ある科学者は，今までに培養されたヒーラ細胞をすべて秤に載せたら，5千万トンを超えるだろうと言う。個々の細胞の重さが限りなくゼロに近いことを考えると，これは想像を絶する量だ。今までに培養されてきたヒーラ細胞をすべてつなげると1億668万メートルを超え，少なくとも地球を3周はすると見積もる科学者もいる。ヘンリエッタの身長は，人生の盛りのときでさえ，150センチそこそこしかなかったのだが。」とある。当初，その子供たちが，母親の細胞が生き続けていることなど知っているはずもなかった。

以下に，本書の章立てを記した。作家が創り出した虚実の世界ではなく，ノンフィクションであるが故の，赤裸々な現実とそれを取り巻く人間模様は，医学や生物学に携わらない我々にも，科学のあり方を自問するよい材料となる。専門家でない皆さんにも一読をお勧めしたい一冊である。

プロローグ
第1部　　生
1.運命の検査，2.クローヴァー，3.診断と治療，4.ヒーラ細胞の誕生，5.「真っ黒なものが体中に広がっている」，6.初めての電話，7.培養細胞の死と生，8.再入院，9.ターナーステーション，10.霊の仕業，11.痛みの悪魔
第2部　　死
12.嵐，13.ヒーラ・ファクトリー，14.ヘレン・レイン，15.虐待，16.白人も黒人も，17.人の道にもとる研究，18.もっとも奇妙な雑種生命体，19.クレイジージョー，20.ヒーラ爆弾，21.夜の医者，22.明かされた名前
第3部　　永遠なる命
23.「生きるんだって」，24.せめてすべきこと，25.「ぼくの脾臓を売っていいなんて誰が言った」，26.プライバシーの侵害，27.不死の秘密，28.ロンドンの後，29.デボラとの対面，30.ザカリア，31.死の女神ヘラ，32.「これが全部母さん」，33.ニグロ専用精神病院，34.医療記録，35.魂の浄化，36.天に属するもの，37.「怖がることなんて何もない」，38.クローヴァーへの遠い道
登場「人物」のその後
あとがき

（清水建設株式会社　技術研究所
ファイン環境グループ長　山口一）